

春先から初夏にかけての山菜というと、ワラビ・タラの芽・タケノコなどがあり、山菜取りを楽しみにしている方も多いのではないでしようか。

中でもタケノコは、種類ごとに次々と芽吹いて食卓をにぎわさせてくれます。

今回は、鹿児島で昔からタケノコの中で一番おいしいといわれ、ダイミヨウダケの発祥の地ともいわれる「台明寺」と、ダイミヨウダケで作られた笛「青葉の笛」について2回シリーズ

『鹿児島県史』にも、「平安時代に比叡山に倣つて、国衙鎮護の道場として創建されたのが台明寺だろう」ということが書かれています。

二、台明寺の創建

台明寺の創建時期については、今のところはつきりしていません。古文書

には、正嘉元（一二五七）年に台明寺で新しい鐘を作り、その鐘の銘文の中に「天慶九年の頃の古い鐘があつて、その小さな鐘を改めた」ということが書いてあります。天慶九年は九四六年なので、これが真実であったとする年なので、これが真実であつたとする年と、十世紀半ばには台明寺があつたことと、十世紀半ばには台明寺があつたことが分かります。

三、聖域としての台明寺

では、いつごろからこの地が宗教的な聖域となつたのでしょうか。寺院内にあった日枝神社の創建については、『神社明細書』の中で、弘文元（六七二）年と書いてあります。しかし、大隅國の建国は和銅六（七一三）年で、当時はまだ日向國の一部であり、朝廷に反発を持った隼人の影響が非常に強い地域でした。朝廷側の神道や仏教の考え方方が早い段階から伝え広まってきたの

は考えにくいことから、おそらく、大隅国建国の前後には宗教的な地域として使われていたのではないかと思われます。

このように、台明寺域は当初は修験者たちの修業の場である靈窟として、台明寺が創建されてからは鎮護国家的な性格の寺院としてその役目は変わつてきました。

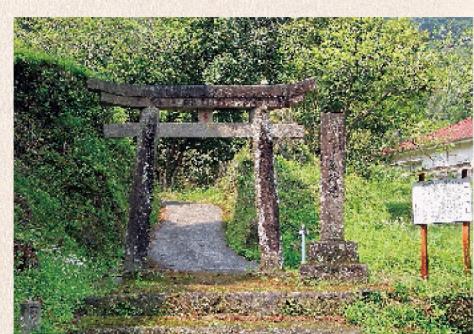
今、台明寺跡を見渡すと全くその面影がありませんが、十五世紀半ばには「三十四の房があつた」と記録が残っていますので、当時は大変大きな寺院だったということが想像できます。

これから、台明寺渓谷は若葉の鮮やかな季節を迎えます。当時の台明寺の面影を思いながらの散策はいかがでしょう。

台明寺の位置については、『台明寺牒』（一二四〇）に「鬼氣を禦がんが為、國衙の丑寅の方において、鎮護國家の

道場を建て置く」と書かれています。要約しますと、大隅国の政庁の中心であつた国衙の丑寅（東北）の方向から災いが来るとされているので、それを防ぎ、大隅国が繁栄できるように台明寺を建てた、ということになります。

これは、古代中国から伝わった「風水」に基づいた思想です。



*1 寺院などを壊し、僧尼や寺院が受けた特権を廢すること。

*2 律令制（古代）における公文書のひとつ。

*3 神仏を祭った岩屋。神仏の宿る岩穴。

*4 僧侶と弟子が修行・生活する建物。